

『忘れられた巨人』

カズオ・イシグロ 著 土屋政雄 訳 ハヤカワepi 文庫 980円(本体)

正解の出し難いテーマに果敢に挑む「小説」

会員 酒井 昌弘 (69期)



1 はじめに

文庫本にして496ページの長編である。そして本作品のテーマは、『過去の(辛い)記憶を呼び覚ますことの是非』、及び『異民族が混在して居住する社会における、異民族の共存方法と、その可否』であろう。

いずれも昨今、扱いの難しいテーマにて、SNS等で意見しようものなら、どんな立場の意見でも、たちまち「炎上」してしまうことは必至だろう。正解を出し難いこれらテーマに対し、作者カズオ・イシグロ氏は果敢に取り組みました。私としては、カズオ・イシグロ氏がこれら難しいテーマに取り組みされるに際し、(論文やエッセイでなく)「小説」という手法を採られた点が、小説中で人称が入れ替わったり、登場人物が(平気で)嘘をつくといった独特の小説的技法と併せ、とても上手く嵌っているように見え、カズオ・イシグロ氏の野心的目論見は、かなりの部分で成功しているように思えた。

2 本作品のあらまし

ある「悲劇」を機に、「魔法」によって「人々の記憶が失われてしまった」6世紀頃のイングランドが舞台。主人公アクセルとその妻ベアトリスの老夫婦も、仲睦まじく暮らしてはいたが、やはり記憶は失っている。そんな老夫婦は、ある日「彼らの『息子に会う』ため」旅に出ることにする。旅の途中、老夫婦は様々な人物と巡り合い、「(記憶が失われた)世界の秘密」を知り、更には「その秘密が解かれる」

様を目撃する。そして人々が、過去の恐ろしい記憶を取り戻した後、その後のイングランドの暗い歴史や(渡来サクソン人による土着ブリトン人の圧殺)、老夫婦達自身の悲劇を予感させた上、作品は終わる。

3 作者カズオ・イシグロ氏について

周知の通り、2017年ノーベル文学賞受賞者である。幼い頃に、御父君の仕事の都合で、日本から英国へと移住され、1980年代初めに英国に帰化された。

私は、カズオ・イシグロ氏の作品については、「Never Let Me Go:邦題『私を忘れないで』」「The Remains of the Day:邦題『日の名残り』」と本書(『The Buried Giant』)の3冊を拝読させて頂いた。何れの作品も、登場人物の日常を淡々と書き連ねているように見えつつ、いつの間にか背後の重いテーマがジワリと被さってきて、何とも言えぬ不安や恐怖、そして悲嘆を醸し出して終わるという作品で、分類としては全てバッドエンドであった。ただ読後感は何れも不思議と悪くなく、しかも読後、とても深く考えさせられる内容であった。そんな訳で、ノーベル文学賞選考委員会については、昨今、醜聞も多々聞こえてくるようだが、選考能力自体は、なんだかんだ言ってもやはり凄いと感服を致した次第。会員の皆様におかれても、もし未読の方がおられたならば、是非、この機会に、お読みになってみられることをお勧めしたい。